

なごや 文化 情報

2019
5・6
May / June

No. 386

NAGOYA
Cultural
Information

随想／永見 隆幸(音楽家 著作家 舞台ディレクター) 特集／「コノハなごや」受賞作品
この人と…／名鶴 ひとみ(名鶴ダンスカンパニー主宰)
いとしのサブカル／御陵 正人(時代劇団「御陵一座」座長)



2019

5・6

May / June

Contents

名古屋市市民文芸祭 小・中学生の部 受賞作品…………… 2

随想 大言壮語～巧言令色鮮矣仁
 永見 隆幸(音楽家 著作家 舞台ディレクター)…………… 3

第2回「コトノハなごや」受賞作品…………… 4

この人と…
 名鶴 ひとみ(名鶴ダンスカンパニー主宰)…………… 6

ピックアップ 名古屋に新たな演劇賞創設！…………… 10

いとしのサブカル 御陵 正人(時代劇団「御陵一座」座長)… 11

おしらせ…………… 12

「なごや文化情報」編集委員

- 上野 茂 (ナゴヤ劇場ジャーナル編集長)
- 森本悟郎 (表現研究・批評)
- 山本直子 (編集・出版 有限会社ゆいぽと代表)
- 吉田明子 (人形劇団むすび座制作部長)
- 米田真理 (朝日大学経営学部教授)
- 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

表紙

作品

林檎 No.145 青森

(2015年/Type-C Print/432mm×356mm)

写すことは捉えること。しかし、風景は私の前で移ろう。
 その幻を求めて、今は林檎園の前に立っている。
 セザンヌの卓上の林檎に代えて。



先間 康博 (さきま やすひろ)

- 1966年 福岡市生まれ
- 1998年 名古屋大学理学研究科満期退学
- 2006年 林檎 ニュートンもセザンヌも僕も(ツァイト・フォト・サロン)
- 2007年 Japan Caught by Camera(上海美術館)
- 2016年 Wildfire (ギャラリーHAM)

「2018年 名古屋市市民文芸祭」
 (第六九回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
 短歌の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆ 名古屋市立供米田中学校2年 渡辺 美愛

夏の風流れる雲を引き寄せて
 君の横顔少し隠した

◆市会議長賞◆ 名古屋市立桜田中学校1年 大谷 悠人

湧き水が流れ出てくる釣り堀のマス釣るたび
 歓声あげて

◆市教育委員会賞◆ 名古屋市立駒方中学校3年 松久 千紘

秋の夜にベッドに寝そべり本開く
 言葉の海にひとり漕ぎ出す

◆市文化振興事業団賞◆ 名古屋市立楠中学校2年 山田 柚葉

夏の日の夜空に光る花火見て
 瞬きしたらもう闇の中

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆ 東海市立大田小学校3年 内村 芽依

じゆうちようまつ白だからだいすきだ
 わたしのおもいじゆうに書ける

◆中日賞◆ 名古屋市立天白中学校3年 木村 果鈴

やらなければ課題を机の上ののせ
 そのまま放置で夏は過ぎ去る

随想

大言壮語～巧言令色鮮矣仁



ながみ たかゆき

永見隆幸(音楽家 著作家 舞台ディレクター)

20代と30代の殆どを欧米で過ごし、国際的な実力派歌手として活躍。オペラやミュージカルで数多く主演を務めた。指揮者や指導者としても定評がある。日本では文化庁芸術祭主催公演やNHKクラシックスタジオなどに出演。メリー・アーティスト・カンパニー全公演の芸術監督を務め、『The Voice～Frank Sinatra』ほか、主演多数。昨年のトリノ王立歌劇場における公演や BHS アカペラ世界王者「Crossroads」との共演などでも脚光を浴びる。代表する著書に『銀の光輝』、CDに『My Blue Heaven』。現在、ザ・ディライトフル・カンパニー Artistic Director、東京二期会会員、ほか。

やれ、フェイスブックだラインだと言われてもピンと来ない。Social Network Service は苦手だ。仲間を集めるのには適しているらしいが、人間の器が小さくなったりコミュニティを狭めたりする弊害も指摘されている。テレビや新聞にすら目を通さない自分には無縁の代物だ。

若手の舞台人に、自ら書いたという SNS の記事を見せられた。横にいた知人が、よせばいいのに「自画自賛のテンコ盛り」と意見する。「誰も褒めないから自ら主張するしかない。どうしろと言うのですか」と件の人は開き直った。一理あるとは言え、他人様の世辞ならまだしも、「物凄い」だの「素晴らしい」だの「感動を与える」だの「世界観がある」だの、聞いている方が赤面するような最上級の形容詞を自ら並べ立てるのは、野暮の極み。若い世代に留まらず、先輩にも我々の中にも、他人様の前で己を慰めることが好きな手合いは幾らでもいる。実際、そんな連中の舞台に限って中身が無い。一方、力量不足故の謙虚さや未熟故の恥じらいが、原動力にもなり人の心を打つ。

高名な演出家が、晩年になって「もっと『言葉』を大切にすべきだった」と述懐した。独創的な仕事で名を馳せた彼は、つまらぬ破壊者でもあったことを

懺悔した。今日は、擬物の時代、コピーの時代、素人の時代と呼ばれ、本物は生き難い。言霊まで持ち出すのは行き過ぎかもしれぬが、言葉の定義すら都合よく歪めて恬として恥じぬ昨今だからこそ、言葉を大切にしたい。言論の自由が大切なのは無論のこと。だからと言って、何をどう表現しても許容されるべきというのは机上の空論である。

感動という言葉も、よく浪費される。感動なんぞ、生涯に幾度も味わえるものではない。素晴らしい作品も一握りに満たない。物凄い舞台に出あうのも極く稀だ。大人の配慮は、時として真実を見る目を曇らせる。下手クソでも有名になって話題を集める舞台人はゴマンといるし、実力があっても世に出ることができない者も大勢いる。それでも前を向いて生きて行かなくてはならない。報われずとも努力するのは当たり前。どの世界においても、どの水準にあっても、人間一匹が食べて行くのは、それ自体、大変なことなのだ。

務めた舞台に自分自身が満足したことはない。創った舞台に完成と言えるものもない。達成感に酔い、完成に近づいたと感じるようになったら愈々お仕舞。何か一つ解る度、その向うに理解を超えた深遠なる世界がまた新たに広がって行く。

文芸による名古屋の魅力発信事業

第2回「コトノハなごや」受賞作品

「日常のなごや」の魅力を言葉やアート表現にしていく体験や短編作品応募で参加する「コトノハなごや」。2017年度にスタートし2年目を迎えた今回も、「なごや」を切り取った10枚の写真をもとに、日常での体験や人との交流、風景との出会い、ものへの思い出などの「なごやとわたしの物語」を募集しました。エッセイ・小説・詩・短歌・俳句などで表現した353の力作が寄せられ、厳正なる審査を経て、金賞1、銀賞2、佳作2の5作品が選ばれました。今回は、その中から見事に金賞・銀賞を受賞した3作品をご紹介します。

金賞

<選んだ写真> 大須観音

「懺悔」

チヨコラブ(名古屋市)

あなたに謝りたいことがあります。

私は物事を先伸ばしにするのはよくないと教わりました。

他力本願はよくないと教わりました。

口先だけで行動しないのもよくないと教わりました。



写真：秦 義之

私は今まで大変失礼なことをしてしまっていたと、気づきました。

この場を借りて心よりお詫び申し上げます。

手を合わせて頭を下げればよいということではないことも重々承知しています。

大須観音様

本来ならこちらがお供えをすべきところ、いつも唐揚げや、アイスクリームや、みたらし団子や、たこ焼きを食べながらお参りに行っておらず、申し訳ございません。

パソコンや、携帯カバーや、服など、自分の欲望を優先し、後回しにしてしまったこと、心よりお詫び申し上げます。

しかしながら、それでも、またお参りに来ますので何卒ご利益をいただけませんでしょうか。

次からは2回に1回、上前津駅で降りるのをやめて、大須観音駅で降りるようにし、真っ先に足を運ぶようにします。どんなにいい匂いが漂ってこようと、欲望に抗います。

ですので、何卒ご利益、ご縁を頂きたく存じます。何卒何卒よろしくお願い申し上げます。

銀賞

<選んだ写真> セントラルパーク/ギャラリー

「セントラルばあちゃん」

みずの たいが
水野 大雅(名古屋市)

「真ん中の赤いクマのどこ見やあせ」

突然かかってきたかと思えば、訳がわからないことを一方的に言われた電話。「やっとかめ」とか「なも」なんてコアな名古屋弁を捲し立てられ、一方的に切られた電話。

電話の主と同居している伯母に「翻訳」してもらって、辛うじて通じた。

「え〜?なんで俺がばあちゃんのハイク見なあかんの?」

「どうせ大学生だから、ヒマでしょ」という、これまた遺伝子が見事に引き継がれた伯母の言葉。祖母の家は今でも名古屋の由緒正しい下町に住み続けているのと同様に、彼の両親は一戸建てを買うために、泣く泣く名古屋市内から市外に“落ちのびた”。そんな辺縁に住む俺に頼むなよ。と思っていながらも、ぶつぶつ言って、カノジョとのデートにかこつけて見てやることに。カノジョはもちろん、名古屋市内。住所が〇〇区から始まる人だ。

「へえ、随分と流麗な字なのね。」

真ん中の赤いクマ(翻訳「セントラルパークのギャラリー」)に展示していた祖母の俳画を二人で見ると、意外にもカノジョは関心を示してくれた。こっちは全く関心がない。せいぜい読めた句が「(炎天や名古屋弁なる婆三人)」という、読まなきゃよかったと思わせる句だった。



写真：秦 義之

セントラルパークに、セントラルブリッジ。そのど真ん中にテレビ塔が鎮座。そういや鉄道会社の名前も日本語名は東海なのに、英語に直すとセントラルだったっけ。そう思うと、そんな“セントラル”大好きな名古屋の、そんな場所にあのばあちゃんの展示は、実にお似合いではないか。思わずプツと吹き出した彼に、彼女が言う。

「ねえ、住んでいる所って不便でしょ。」

「まあね……。でもさあ、親が建ててまったし…」

「私と結婚したら、名古屋市内に戻れるよ。パパの家に一緒に住めばいいから!」

嗚呼、俺は一生、セントラルな女に振り回されるらしい。

銀賞

<選んだ写真> 名鉄電車

「ねがいごと」

あさはら なみ
麻原 奈未 (名古屋市)

神宮前駅あたり、どうかな。

名鉄電車で花火を見に行った帰り道、3歳年下の彼がポツリと言った。二人の通勤にも便利だし、熱田さん近いからお参りもすぐ行けるよ。あ、あとEってラーメン屋が駅の近くにあってさ、超こっぴりなんだけど



写真：秦 義之

美味いんだよ。それにさ、たたんたたんって、聞こえるよ。こないだ言ってたでしょ?電車の音が聞こえる生活っていいねって。どうかな。

ポツリがきっかけになったのか、彼は捲したてるようにここまで言って、眼鏡を中指で触った。恥ずかしい時の彼の癖。些細な会話を覚えててくれたことが、嬉しかった。

秋の終わり、二人での生活が始まった。休みの合わない私たちは、二人で過ごす時間はあまりなかったけど、近くのスーパーで玉葱が1袋79円で買えたことをスタンディングオベーション並みに賞賛したり、彼が失敗した料理を笑いながら食べたりした。

初めての年越しは、熱田神宮で初詣をして、そのままEで年越しラーメンしようという話になった。人混みに酔った私はラーメンなんか食べるかと思っていたのに、いざラーメンと餃子がテーブルに並ぶと、パキリと割り箸を割っていただきますと手を合わせていた。

フーフーとラーメンを冷ましつつ、何お願いした?と聞こうと顔を上げたら、ラーメンの湯気で彼の眼鏡が真っ白になってて、思わず吹き出した。きょとんとした顔をしている彼を見て、まあ今はいっかと餃子を一つぱくつく。Eのラーメンのこってりドロドロスープはなかなか冷めない。猫舌の私が少しずつ食べ始めた頃には、彼は既に食べ終わって眼鏡を拭いていた。鼻先が赤くなった彼は、田舎の子供みたいだった。

初詣ダイヤなのか、遠くで電車のたたんたたんという音が聞こえる。ふとさっきの質問を思い出し、ねえ何お願いした?と改めて聞いたら、え、いや、ちょっとしたことを、と言って、さっき拭いた眼鏡をもう一度拭いていた。

授賞式 & 公開講評トーク

「コトノハなごやサロン」

2018年12月1日(土)に栄のナディアパーク7階「7th cafe」にて、入選20作品の中から受賞作品の発表と、選考委員の中村航氏、吉川トリコ氏、武田俊氏による公開講評トークを行う「コトノハなごやサロン」を開催いたしました。入選作品の作者の皆様をはじめ、たくさんの方々にご参加いただきました。第1回目と同様に受賞作品は「コトノハなごやサロン」当日に発表したため、受賞者の皆様からは歓声や驚きの声があがりました。授賞式では河村たかし名古屋市長より、賞状と副賞が手渡されました。また、入選20作品の公開講評トークでは、選考委員と作者の皆様とのトークが繰り広げられました。作者の皆様にとっては、直接作品講評を受けるだけでなく、選考委員に質問もできる貴重な時間となりました。

次回の「コトノハなごや」について

2018年度の第2回に続き、2019年度も「コトノハなごや」を開催いたします。作品募集に関する事など、詳細は決定次第、公式ウェブサイト(<https://kotonohanagoya.jp/>)で発表いたしますので、ぜひご応募ください。



「コトノハなごやサロン」の様子

この人と...

名鶴ダンスカンパニー主宰

な づる

名鶴ひとみさん

歌とダンスと演劇を合体させたミュージカル。その華やかな世界を夢見る若者たちは星の数ほどいる。そんな若者たちは、地域の劇団やダンススタジオでスキルアップするか、芸大・音大のミュージカル科に入学することになる。だが、プロへの道は想像を絶するほど険しい。名古屋市中区で「名鶴ダンスカンパニー」を主宰する名鶴ひとみさん（1949年生まれ）は、半世紀前に宝塚歌劇の舞台をめざし、ストレートでミュージカル女優への夢を実現させた熱意の人だ。宝塚歌劇団退団後はダンススタジオを開設し、ミュージカル俳優を目指す後進を育成。「宝塚歌劇を目指すなら名鶴」といわれるまでになった彼女の、生き立ちと人生哲学を聞いた。

（聞き手：上野 茂）



2014年、千代田に建設された「名鶴ダンスカンパニー」

タカラジェンヌへの夢叶えた熱意の人

——名鶴さんといえば「宝塚」。ご自身も、姉の加代さんも宝塚歌劇団に入団され活躍されました。宝塚を目指した切っ掛け、試験に合格するためにどんな勉強をされたのでしょうか。

「小学4年の時だったと思います。母が名鉄ホールで行われた宝塚歌劇団の公演に、姉と私とを連れて行ってくれたのです。当時活動を行っていたのは宝塚歌劇団と松竹歌劇団のみ。一般にはミュージカルが何なのかも知られていない時代でした。宝塚歌劇の夢のように華やかな舞台を見て姉と私は虜（こころ）になりました。最初に姉が『はいりたい!』



（上）広く、天井の高い新スタジオ（下）年齢を感じさせない名鶴さん

と声を上げました。わたしは姉の後ろから『わたしも!』と（笑）。それ以後、母は私たちを、年に何度も宝塚の公演に連れて行ってくれました。姉と私は当然のように宝塚歌劇に夢中になりました」

——名鶴さんのご両親は鶴舞で果実店を営んでおられたと聞いています。どんなご家庭だったのでしょうか。

「場所は鶴舞、中央線高架下に1店、現在、中部大学の名古屋キャンパスがあるあたりにも2店ありました。近くに名古屋大学附属病院があったおかげで、とても繁盛したようです（笑）。両親は経済的に、とても苦労して育ったと聞いています。だから私たち姉妹には、投資を惜しみませんでした」



貝谷八百子バレエ団の発表会(中央)

小4～高3、宝塚受験準備に没頭

——宝塚受験のために、どんなレッスンを受けられたのですか？

「果実店隣の幼稚園で、いろいろな教室が開かれています。今でいう文化センターのようなものだったと思います。姉と私は幼いころから南條流のダンスを習っていました。宝塚受験を決めてからはバレエ、音楽、日舞、三味線、タップと何でもやりました。特にバレエには力を入れました。有名な貝谷八百子バレエ団の教室が名古屋にもあり、高校3年まで6年間通いました。私は負けん気が強かったので、誰よりもうまくなろうと懸命でした。転んでも転んでも、フェット(回転)の練習をしました。週末には宝塚に通い、受験のためのレッスンを受けました。両親の経済的負担は大変なものだったと思います」

——高校は名門・金城学院でしたね。どんな生徒さんだったのですか。

「金城(中学、高校)を選んだのは私ではなく両親でした。父が若いころ丁稚奉公に出た店のお嬢さんが金城生だったそうで、自分の娘も行かせるかたんでしょね。先に金城生になっていた姉も『絶対金城がいい』と後押ししてくれました。クラスメイトに負けたくない、勉強も頑張りました」

——そして宝塚受験。名鶴さんは高3で受験され、ストレートで合格されました。

「美人だった姉が3度目で合格しました。私はダメだったら東京の大学が、フランスに留学させてもらおう、なんてことを考えていたんです(笑)。姉の合格は私が高1の時54期生。私は56期生になります。姉の合格は本当にうれしかった。自分が合格した時よりも誇らしく思えました。私がストレートで合格できたのは、姉を見て、歌やバレエの合格レベルが分かっていたからだと思います」

——56期生は1968年に宝塚音楽学校に入学し、70年に卒業。同年宝塚歌劇団に入団したのは70人。同期生に

はどんな人がいらしたのでしょうか。

「後に雪組のトップスターになる麻実れいさん、雪組と星組で娘役トップになる東千晃さん、そして人気歌手になる小柳ルミ子さん。石田ゆりさん(女優・石田あゆみの妹で、後になかにし礼と結婚)は音楽学校卒業後、入団を放棄されました。小柳さんも入団の年(70年)に初舞台のみに出演し退団されました。石田さん、小柳さんは芸能界指向が強かったようです」



金城学院高校時代の級友と(左端)

入団1年目、大役ゲットし新人賞

——名鶴さんは56期生の中で、どのような存在だったのでしょうか。また、ご自身のレベルは同級生と比較してどうでしたか？

「私は小さくて、スタイルもあまり良くありませんでした(苦笑)。目立たない生徒だったと思いますが、実技、学科の成績はトップクラスで、委員長をさせていただいていました。在団中の一番の思い出は、入団1年目の71年3月に、月組の『ドン・ホセの一生』で、メインキャストのミカエラに抜擢され、10月には中日劇場で公演できたことです。1年目の新人に大役が与えられることは異例中の異例で、団から新人賞をいただきました。故郷に錦を飾ることができ、毎日のようにマスコミの取材を受けました。両親にも恩返しのできたのではと思いました」

——しかし名鶴さんは入団から3年後の73年に退団されました。何か特別な事情があったのでしょうか。

「退団を決断したのは、宝塚歌劇団は男役中心の世界だと思ったこと。結局自分はこの世界に向いていないと実感しました。両親も、早く結婚して普通の女性の幸せをつかんでほしいと願っていました。私は研究科1年で大役を与えていただいたにもかかわらず、結婚を理由にさっさと退団してしまいました」

——つらい決断をされたのですね。しかし負けず嫌いの名鶴さんは、落ち込む間もなく次のステップを踏み出します。

「歌劇は歌とダンスとお芝居の総合芸術。でもすべてを完璧にできる人はいません。結局、中途半端になってしまう。

だったらどれか一つのことを極めたいと思いました。そして選んだのがジャズダンスだったのです。宝塚歌劇団退団後、結婚し2人の子供に恵まれました。私は子育てをしながら東京や宝塚に通い、ジャズダンスの先生方のレッスンを受けました。そして新栄のスポーツ名古屋にスタジオを開設したのが82年。宝塚歌劇団退団から10年後のことでした」



宝塚音楽学校本科生時代の歌の発表会



研一生の時、抜擢されトップスターの古城都さんと

退団から10年、新栄にダンススタジオ

——劇団四季が東京で「キャッツ」を上演し、若者たちの間にミュージカルブームが巻き起こるのが83年。スタジオのオープンも、まさにタイムリーでした。

「オープン時には約100人の生徒が集まりました。88年12月には中日劇場で第1回の公演を行うことができました。その後も生徒は増え続け、鶴舞駅前にスタジオを移した時には450人にもなっていました」

——世界デザイン博(89年7月15日—11月26日)が開催されるなど、名古屋が最も元気な時代でしたね。

「デザイン博では市民ミュージカル『バード』の演出助手を務めさせていただきました。3か月間のロングランでしたから、それはもう大変でした。その後スタジオを栄のアシックスビル(3-5F)に移しました。ちょうどナディアパークが建設中のごころでした。なにせ名古屋の中心地。生徒はOLを中心に800人近くまで増えました。3フロアとはいえ、教室はラッシュ状態。ステップで床が抜けるのではないかと心配したほどです(笑)」

——私も栄スタジオオープンの祝賀会に参加させていただきましたが、名鶴先生は体調不良で欠席され、お目にかかることができませんでした(笑)。

「若いころから酷使してきた体ですからね。でも心身ともに最も落ち込んだのは、現在のスタジオ(クレインビル)建設の前後でした」

——では2014年のクレインビル建設についてお聞かせください。スタジオの建設には大変なご苦労があったと推

察しますが、どのような展望を描いて建設に着手されたのでしょうか。

「一番の理由は、栄のアシックスビルが売却されたため、立ち退きを要請されたこと。何とかスタジオを守ろうとしましたが、かないませんでした。広く大きなスタジオが欲しかったのは、公演のリハーサルのためでした。通常のレッスンはコンパクトなスタジオでも可能なのですが、公演のためには、本舞台と同じ大きさのスペースが必要になります。芸術劇場や芸術創造センターのリハーサル室が自由に使えばいいのですが、抽選があります。中区や東区のスポーツセンターを使ったこともありましたが、床が滑り過ぎるので、わざわざ100キロもあるリノリウムを運んで対応しなければなりませんでした」

千代田に念願のスタジオ建設

——それは全国のダンススタジオ共通の悩みでしょうね。

「幸いだったのは、10年ほど前に約100坪の土地を購入していたことです。しかし私が理想とするスタジオを作るのは容易ではなかったようで、何人もの設計士がギブアップしてしまいました(笑)」

——(姉の)加代さんがお亡くなりになったのも、そのころだったと聞いていますが。

「姉は私が宝塚歌劇団を退団する10カ月前に、結婚のために退団していました。姉は歌うことが大好きで、退団後もホテルのディナーショーや、亡くなる前は介護施設などで歌っていました。姉は私と違って社交家でした。私のライバルでもあり、憧れでもありました。両親を亡くした直後でもあり、とても大きなショックを受けました。ともあれ、立



最愛の母・露子さんを囲む名鶴さん(左)、姉の加代さん



広々としたスタジオで伸び伸び躍動する生徒たち

派なスタジオが完成しましたが、私は抜け殻になってしまいました」

——心からお悔やみ申し上げます。話題を変えて、名鶴ダンスカンパニーの公演についてうかがいます。当初から公演には、今村ねずみ(THE CONVOY)さんら、東京の有名ダンサー・振付家を起用されています。特別な理由があるのでしょうか。

「東京の赤坂にTap Tipsというショーパブがあり、宝塚の仲間とよく訪れていました。その店の人気者だったのがTHE CONVOYでした。名古屋出身のオーナーも好意的で、彼らは私のスタジオのオープン当初から、手助けしてくれました。特にねずみさんは公演の構成や振付に率先して参加してくれました。以来、うちの公演には、ねずみさんつながりのダンサー・振付家が必ず参加してくれるようになりました。本当に感謝しています」

——公演といえば、2016年クレインピルのスタジオ内で主力メンバーがミニ・ミュージカルを行いました。至近距離でダンサーの息遣いを感じることができ、私は彼女らの実力を再認識しました。これをシリーズ化する予定はありませんか？

「最近スタジオ公演を行う団体が増えているようですね。確かにご来場いただいた皆さんには好評をいただきました。シリーズ化するかは別にして、またやってみたいですね。でも、着替えやメイクのためのスペースがなかったり、スタジオ内は音響や照明の設備も十分でなく、お客さまが使用できるトイレの数も少ない。解決すべき課題も少なくありませんね」

成功の秘訣は`努力する才能、

——当地では`宝塚を目指すなら、名鶴ダンスカンパニー、といわれています。名鶴ダンスカンパニーからは何人もの宝塚歌劇団、劇団四季、あるいはテーマパークダンサー合格者が毎年出ています。さまざまなプロテストに合格する秘訣があれば教えてください。

「メンタル面で言えば、努力する才能がある人は強い、と

いうこと。困難を乗り越える力、折れない心、そして自身に対して謙虚であること。入会時に『死ぬ気で頑張ります!』といった生徒が3カ月で辞めてしまうケースもありますが(笑)。基本的なことを言えば、優れた身体能力と声の良さ、当たり前のことですが、健康な体と心の持ち主であることだと思います」

——健康な体といえば、昨年10月の公演で、名鶴さんは客演のJUNさんとダイナミックでスリリングなダンスを披露されました。失礼ながら名鶴さんのお年で、あれほど激しいダンスができるとは驚きです。やはり日々の鍛錬ということでしょうか。

「自分自身のバレエのレッスンとフィジカルトレーニング。いくつになっても教師である限り体のメンテナンスは欠かせません。時間とお金を惜しんではなりません」

——長い取材にお付き合いいただきありがとうございます。最後に名鶴ダンスカンパニーの後継者についてうかがいます。彼女らには何を望みますか？

「多くのダンスを愛する若者たちが、このスタジオでダンスを学び夢を描きました。後継者には、生徒たち一人一人と、スタジオを離れても、出会えば笑顔であいさつできる関係を築いてほしい。常に先を見て、物事を推し進める力を付けてほしいと思います」



公演で客演のJUNさんと踊る名鶴さん(2018年10月)

□プロフィール

1968年、宝塚音楽学校に入学。70年「ハロー・タカラヅカ」で初舞台を踏む。71年月組公演「ドン・ホセの一生」にミカエラ役で出演、新人賞を受賞する。

82年、ジャズダンス専門スタジオ「スタジオNo.1ナゴヤ」(後の名鶴ダンスカンパニー)を開設。

2009年の公演「NOUS 14th」が名古屋市民芸術祭特別賞を受賞。14年、日本ジャズダンス芸術協会ダンスコンクールで「振付家協会賞」を受賞。

同年、中区千代田に新スタジオを建設。名称を「名鶴ダンスカンパニー」に改める。

17年の創立35周年記念公演「NOUS 17th」が名古屋市民芸術祭特別賞を受賞。

ピックアップ

名古屋に新たな演劇賞創設!

2019年4月、名古屋に新たな演劇賞「アクテノン記念 江崎演劇賞」が名古屋市文化振興事業団により創設されました。

この賞は2018年6月に逝去された故江崎順子氏の遺志を受け継ぎ、ご遺族からの寄付をもとに、江崎氏の名古屋市域における演劇分野の振興に対する情熱とアクテノンへの想いを後世に受け継ぐことを目的とした演劇賞です。

名古屋市出身の江崎氏は旧名古屋演劇アカデミー2期を卒業後、1984年に「劇団・夏蝶」を結成。長年にわたり日本の女性の生き方を描いた作品を中心に舞台上で上演し、他劇団への客演、テレビ、ラジオドラマに出演。司会や朗読の講師など多岐にわたり活躍されました。

また、名古屋市演劇練習館アクテノンの開館当時から運営委員を務め館の運営に深く関わると共に、アクテノン・フェスティバル実行委員会にも参加。アクテノン参観日（利用者以外にも館を一日無料開放するイベント）などにも積極的に参加し活動されていました。江崎氏が亡くなられた3ヶ月後の9月には、アクテノンに愛情を持ち、長年にわたり支えてきた氏を偲ぶ企画展、「江崎順子のカーテンコール～劇団・夏蝶のあゆみとともに」がアクテノンの1階資料室コーナーで約1ヶ月にわたり開催されました。

この地域には数年前まで「松原英治・若尾正也記念演劇賞」がありました。地元演劇の振興と松原英治氏・若尾正也氏のお二人の業績を偲ぶために1996年に創設された演劇賞です。社会状況や経済事情の変化などもあり2013年が最後となりましたが、37名を数える受



賞者は、既に鬼籍に入られた方を除きほとんどの方々が今も第一線で活躍され、この地域の演劇の発展に貢献されています。

5年の空白期間を経て新しく創設されたこの「アクテノン記念 江崎演劇賞」が、この地域の演劇人の大きな刺激となり名古屋市域の演劇シーンが活性化し盛り上がっていくことを期待しています。（吉田明子）



一人芝居「花いちもんめ」

<アクテノン記念 江崎演劇賞>

- ・近年の継続した演劇活動がとくに顕著で、名古屋市域の演劇の振興に貢献のあった個人または団体に毎年1件授与する。
- ・正賞：賞状、副賞：賞金30万円。（受賞記念公演に対し会場費として上限25万円を助成）
- ・名古屋市域の各演劇の分野で活躍する5名の選考委員により選考。
- ・第1回授賞式は2020年3月中旬を予定。

江崎順子プロフィール

俳優。劇団・夏蝶代表。

劇団・夏蝶公演 '93「女の庫」(作/麻創けい子 演出/木崎裕次)と '98「マンザナ、わが町」(作/井上ひさし 演出/木崎裕次)で、2度名古屋市民芸術祭賞受賞。

2004年一人芝居「花いちもんめ」(作/宮本研 演出/わらしべ長者)で名古屋演劇ペンクラブ賞受賞。

2018年6月12日逝去。

いとしの サブカル

時代を彩る時代劇 その名は大衆演劇!

時代劇団「御陵一座」座長

みさ さぎ まさ と
御陵 正人

NHK 名古屋放送児童劇団を経て桐朋大学演劇専攻へ入学。演出家・蜷川幸雄に教えを受ける。2016年7月の鈴蘭南座緞帳落とし公演を機に御陵一座を旗揚げ。全国各地で興行を行う傍ら、座長大会、大衆演劇劇団へのゲスト出演等も行う。

「平成最後」というのは最近(2019年3月現在)の流行語である。一つの歴史が終わればまた新しい歴史が始まる。いつの時代も人々の生活や日々の娯楽を支えてきたのがサブカルチャーだ。



現代のサブカルといえばアニメや特撮などが挙げられる。その中でも時代モノをテーマとした作品は本当に多い。サムライニンジャのアニメはクールジャパンの代名詞、特撮戦隊ヒーローの原点は歌舞伎演目の白浪五人男。戦国武将や歴史の偉人たちは次々と現世に転生し全国各地の観光を支えている。とりわけ名古屋は徳川御三家のお膝元ということもあり「時代サブカル」に明るい土地柄である。

その時代サブカルの歴史で重要なのが演劇だ。

日本で一番、1年間の上演回数が多い演劇のジャンルをご存じだろうか。現代劇、シェイクスピアと多々あれども、実は「時代劇」がナンバーワン。そしてその大半を占めているのが、我々が取り組む大衆演劇なのだ。

全国で100を超える時代劇を主とした劇団達が月2~3日の休み以外は年間通してほぼ毎日上演している。家族を主体とした団体構成で、ひと月毎に場所を変え、台本のない「口立て」でセリフを覚える。演目は日替わり、当然その日の本番が終わった後から翌朝までの時間で次の演目

のお稽古。そんな生活を生業とする旅役者達が全国にいる。

江戸文化を基本にド派手なチャンバラや人情味溢れるお芝居+最新ヒット曲から浪曲まで豪華絢爛な衣装に身を包んで踊る歌謡ショー。約3時間たっぷり楽しめて料金は2,000円以下で観劇できる場所も多い。これぞ名の通り大衆のための演劇であろう。

TVも映画も無かった時代、人々の娯楽の中心はお芝居=大衆演劇でもあった。戦時中は遠方の戦地で兵士達の心を時代劇が癒した記録も数多く残されている。「臉の母」や「国定忠治」、「森の石松」などは時代を超えて愛される作品だ。今日もきっとどこかで上演されているはずである。

残念ながら名古屋で唯一の大衆演劇小屋 鈴蘭南座は惜しまれながらも2016年7月に閉館してしまったが、その折に筆者の一座が緞帳落としを務めた際には本当に多くのお客様に見送ってもらい、大衆演劇への愛を感じる事が出来た。少しでも興味の湧いた方は是非とも名古屋は平針の健康センター…もしくは御陵一座の興行まで(笑)。

江戸時代が終わって150年余り。150年後のサブカルで果たして我々はどう描かれるのか? 新しい時代を迎えた今、次はどんなに楽しく胸躍る「時代劇」が生まれるのか大いに期待しようではないか。





文枝

桂文枝 春風亭小朝 東西落語名人会

2019年5月28日(火)
 日本特殊陶業市民会館 ビレッジホール
 開演 18:30 (開場 17:45)
 全指定席(税込) 4,000円
事業団友の会会員、大学生以下、障がい者手帳等をお持ちの方は200円引き。

チケットのお求めは
 名古屋文化振興事業団チケットガイド
 ☎052-249-9387 (平日9:00~17:00 / 予約、郵送対応可)
※その他、事業団が管理する文化施設窓口(土日祝も営業)でもお求めいただけます。
 チケットぴあ (Pコード 491-264)
 ☎0570-02-9999
 名鉄ホールチケットセンター
 ☎052-561-7755



小朝

出場
ファミリー
募集

●応募期間/2019年
7月18日(必着)

第8回 全国ファミリー音楽コンクール

@よっかいち

テーマは 家族と絆



↑詳しくはこちらから

●問い合わせ先・申し込み先/全国ファミリー音楽コンクール実行委員会事務局(三重県四日市市市民文化部 文化振興課内)
 〒510-8601 三重県四日市市諏訪町1番5号 TEL 059-354-8239 FAX 059-354-4873 E-MAIL concours@city.yokkaichi.mie.jp

■主催/四日市市、全国ファミリー音楽コンクール実行委員会 ■助成/公益財団法人 岡田文化財団 ■協力/公益財団法人 三重県文化振興事業団、一般社団法人 全国楽器協会 ■後援/文部科学省、三重県、四日市市教育委員会、NHK 津放送局、三重テレビ放送

頼もしい味方をお探しですか？



集客・販促プランナー



アートディレクター



印刷コンサルタント

株式会社 駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881

〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 <http://www.kp-c.co.jp>

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

← 20Hz → 20kHz →



A&V
PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK

舞台音響/映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
 〒464-0846 愛知県名古屋市中区東区城木町二丁目98
 TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

舞台VTR映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 **エーワン.ビデオ.システム**
 TEL (052)896-2256 FAX (052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
 ◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・舞踊・音楽公演・ホール、DM等にて配布

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい

MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ

〒461-0004 愛知県名古屋市中区東区葵2-11-22 アバンテージュ葵305
 TEL(052)508-5095 FAX(052)508-5097
 URL <http://www.mane-pro.com>

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネージメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

